日本エネルギー経済研究所

2024年7月26日

石油をめぐる日本と中東のあれこれ

一般財団法人
日本エネルギー経済研究所
中東研究センター

研究顧問
保坂 修司
hosaka@jime.iee.or.jp

© JIME-IEEJ

石油とは

旧約聖書に登場する石油

- 糸杉の木で箱舟を造り、箱舟のなかに部屋を設け、**瀝青**でその内と外を塗りなさい。（『創世記』）
- 地上ですべての人は同じことばを話していた。人びとは東から移住し、シナルに定住、そこで石のかわりにレンガをえ、漆喰のかわりに**瀝青**を得た。（『創世記』）
- パピルスで編んだ籠をとり、それに**瀝青**と樹脂を塗って、子（モーセ）をそのなかに入れ、ナイル川の岸の葦のなかにおいた。（『出エジプト記』）

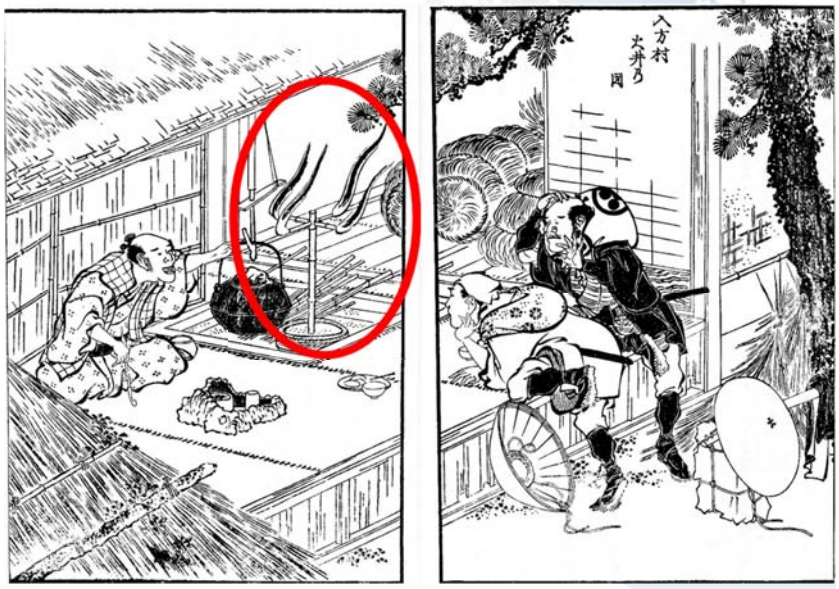
- **現代アラビア語で「石油」は「ナフト naft / nift نفط」**
  - アッカド語のnapṭuから？ → naft Νάφθα
  - 13世紀に書かれたIbn Manẓūrのアラビア語辞典*Lisān al-'Arab*では油一般をさす。
  - 現代アラビア語で油一般をさすのはザイトzayt（油（←zaytūn（オリーブ））、ドゥフンduhn（脂）
    - アラビア石油（Arabian Oil Company / Sharika al-Zayt al-'Arabīya）
  - そのほか石油関連の語としてはカトラーン qaṭrān（タール）、カール qār（ピッチ）、ジフト zift（アスファルト）などがあるほか、ビトロール（bitrōl）も用いられる（ただし、ビトロールは口語ではガソリンの意味）。
  - ナフトは武器としての「ギリシア火」の意味でも用いられる（アラビア語では「アフリカ火」の語も使われる）。

© JIME-IEEJ

日本と石油

現代日本語では「石油」

- 「燃水」「くそうず」「石油」「石漆」「石脳油」「石炭油」「山油」（大鳥圭介の造語）
  - 「又越国献燃土与燃水」『日本書紀』
    - 668年　近江京にアスファルト（燃土）と石油（燃水）が献上される。
  - 越後七不思議
- 「又た私の方でも一番に石油と名附けて仕舞いました」石坂周造『石阪翁小伝』1900年、109-110
  - 石坂は幕末の志士で石油産業の祖（長野・浅川油田、静岡・相良油田を開発）
    - 石坂の跡を襲ったのがやはり尊王攘夷派で薩摩藩の精忠組メンバーだった海江田信義（生麦事件や大村益次郎暗殺に関与？）



橘崑崙『北越奇談』（1812年）

宋代の政治家、沈括の『夢渓談』にはじめて「石油」の語が登場。また、17世紀はじめには李時珍『本草綱目』が日本に渡来、知識人のあいだでは「石脳油」「石油」「石漆」「猛火油」「雄黄油」「硫黄油」の名が知られるようになる。

秋田

新潟

北海道石狩油田

長野浅川油田

静岡相良油田

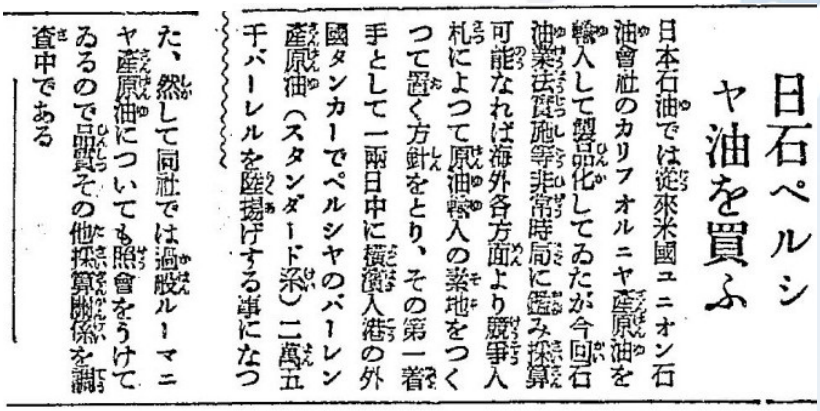
日本と中東石油

- 1921年　日本はイランからはじめて石油を輸入。
- 1934年　日本ははじめてバハレーンから石油を輸入。アラビア半島・湾岸アラブ諸国からはじめて石油を輸入してちょうど90年。湾岸アラブ諸国から海外に輸出した最初の石油。

波斯油五萬噸
半分は海軍用

鈴木商店は今回英波石油會社と特約の上本年度分として波斯石油五萬噸を輸入する事に決せる由なるが内二萬五千噸は軍油原料として納入することに最近海軍省との間に契約を了せり因に波斯石油は質量佳良にして我邦への輸入は今回を以て嚆矢となすと

読売新聞1921年4月14日


日本石油ペルシヤ油を買ふ

日本石油では從來米國ユニオン石油會社のカリフオルニヤ產原油を輸入して製品化してゐたが今回石油業法實施等非常時局に鑑み採算可能なれば海外各方面より競爭入札によつて原油輸入の素地をつくつて置く方針をとり、その第一着手として一兩日中に横濱入港の外國タンカーでペルシヤのバーレン產原油（スタンダード系）二萬五千バーレルを陸揚げする事になつた、然して同社では過般ルーマニヤ產原油についても照會をうけてゐるので品質その他採算關係を調査中である

朝日新聞1934年7月6日

- 2024年5月の日本の原油輸入の中東依存度は95.3%（1位：UAE、2位さ：サウジアラビア、3位：クウェート、4位：カタル、5位：米国

元禄のミイラ取り

- 照つけて色の黒きや侘つらん　信章
- わたもちのミイラ眼前の月　桃青
- 飢饉年よわり果ぬる秋の昏　信章

『江戸両吟集』（1676年）

平安中期の歌人・僧侶、能因法師が日に焼けて旅をしたふりをした故事

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関
「都にありながらこの歌を出ださむこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠もり居て、色を黒く日に当たりなして後、「陸奥国の方へ修行のついでに詠みたり」

延宝元年から二年にかけての大飢饉のことか？

- 延宝の大飢饉を経た秋の暮れ、ミイラのように顔色も悪く、痩せさらばえたまま弱々しくも生き延びて月を眺めている？
- わたもちのミイラ　＝　内臓のあるミイラ
  - ミイラに内臓がないことを知っていた？

俳諧とミイラ

- 「身いらと成し地あらしの風」『物種集』（1678年）
- 「捨車かれ野や牛のみいら国」『俳諧東日記』（1681年）
- 「砂の岑木乃伊の月に照添て」（西鳩）『西鶴大矢数』（1681年）
- 「木乃伊をば取は大事の花軍」『西鶴大矢数』（1681年）
- 「木乃伊こがるる山添の色」『江戸八百韻』（1678年）
- 「みいらとの笠の露にて顔隠し」『独吟廿歌仙』（1680年）
- 「誓ひして二度と入りまじ恋の町／もらふ小指の身胃羅ともなれ」『俳諧団袋』（1689年）

© JIME-IEEJ

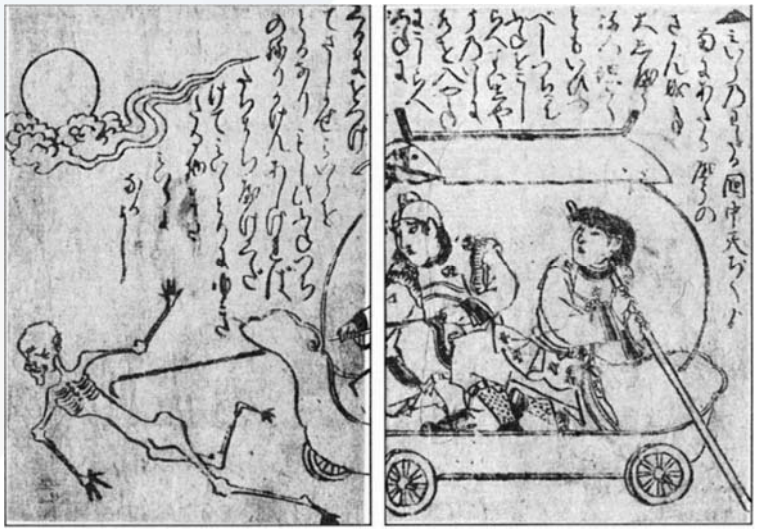
ミイラ取りがミイラになる

- 原省庵『夜光璧』上（1728）
  - 木乃伊を取る者誤つてミイラに成ると云説
- 服部不及子『長ふくべ』（1731年）
  - 居つづけを呼にやったも木乃伊取
- 近松半二『本朝廿四孝』（1766年）
  - 最前よりあれにて様子承れば、どうやらかう木乃伊取りが、木乃伊になる様な御上使様。
- 松葉軒東井『譬喩尽』（1786年）
  - 呼に行人も踊るや木乃伊取り
- 佐々木貞高（為永春水）『閑窓瑣談』1（1841）
  - 古くより俚俗の諺に木乃伊取が木乃伊に成るといふ諭を尋常に云伝ふ。

ミイラ取りがミイラになる＝日本の諺

© JIME-IEEJ

ミイラ取りがミイラになる



「日の下開山名人ぞろへ」
木村八重子等1997（校注）『草双紙集』岩波書店

『日の下開山名人ぞろへ』（17世紀末）

- 木乃伊のわたる国、中天竺より南にあたる。陽の盛ん成事大焦熱地獄とも言ひつべし。土にて舟をこしらへ、水晶の石に水を入、屋根にこしらへ、舟に車をつけてさし寄せ、**木乃伊**を取るなり。もし此舟、土の練り加減あしければ、たちまち焼けてくだけて、**木乃伊**取りに行きたる物、また木乃伊になるよし。

貝原益軒『大和本草』（1709）

- ノビスハンヤ炎暑ノ国ニテ沙漠往来ノ人鉄石ノ舟車ニノル頻ニ悪風至リクツカヘス人々沙中ニトロケ**ミイラ**トナル後ニ来ル者熊手ヲ以トル。

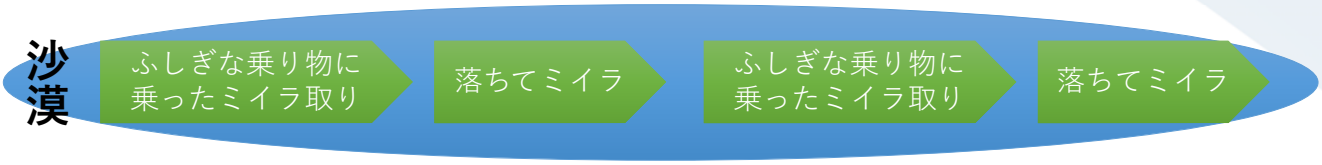
「ミイラ取りがミイラになる」という諺の起源

ミイラ取りの無限連鎖

- 場所
  - 中天竺、アラビア、ネーゴロス、ノビスパンヤ、赤道下
- 灼熱の沙漠
- 土の車、石の車、鉄石の舟車、松の丸太の船。
- 風がふく。
  - あやまって落ちた人は熱砂で乾燥してミイラになる。
- 貴重な薬となる。
  - それを土の車（船）に乗って取りにいく。
- あやまって落ちてミイラになる。
  - それを土の車（船）に乗って取りにいく。

落語「木乃伊取り」
商家の大旦那は、息子の若旦那が吉原に行って戻ってこないので、番頭に迎えにいかせたが、その番頭も吉原に取り込まれて、帰ってこなくなる。そこで大工の棟梁を送ると、その棟梁も戻ってこない。最後に飯炊きを送るが、その飯炊きまでもが……。

人を捜しに行った者がそのまま帰ってこないで、捜される立場になってしまう。また、人を説得に行った者が、かえって説得され、先方と同じ意見になってしまう。
『デジタル大辞泉』より



ルドビコ・ディ・バルテマの旅行記

- 広大な白い砂の**沙漠**があり、北から進んでいくときに、**南から風が吹いてきたら、みんな死んでしまう**。われわれは追い風であったが、10歩離れているとたがいにみえないほどであった。男たちは、**木製の箱のようなものを乗せたラクダ**に乗っていた。そのなかでかれらは寝たり、食事をしたりする。先達が羅針盤をもって先を進む。**多くのものが渇きで死に**、また多くのものが、穴を掘って水を見つけても、飲みすぎて破裂して死んでしまう。**ここでミイラが作られる**。風が北から吹くと、この砂が、シナイ山の支脈である大きな山に当たってたまっていく。

乗り物に乗って沙漠を旅する → 沙漠で遭難 → ミイラになる

南方熊楠は、この記述をミイラ取りの諺と考える

Ludovico di Vartema (1470-1517ごろ)
イタリア人旅行家。イスラームの聖地に入った最初の非イスラーム教徒のヨーロッパ人。マディーナからマッカへの旅にミイラに関する記述。

ミイラ取りとマフマル

ルドビコはマムルーク朝の巡礼団に加わってマッカに向かった。
「木の箱を乗せたラクダ」とはおそらく巡礼用の輿（マフマル）のことを指す。
マフマルは、本来は人が乗るものではなく、クルアーンやキスワなどを載せていた。
ただし、権力者、富裕者、女性、高齢者が屋根付きの輿に乗って巡礼にいくことも一般的。

Lane, E.W. 1860. *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*.

Marshall M. Kirman 1895. *Classical Portfolio of Primitive Carriers*

中国の木乃伊

陶宗儀『南村輟耕録』巻3（1366年）

- **木乃伊**　**回回田地**有年七十八歲老人自願捨身濟衆者絶不飲食惟澡身啖蜜經月便溺皆蜜既死國人磏以石棺仍滿用蜜浸鐫志歲月於棺蓋瘞之俟百年後啓封則**蜜劑**也凡**人損折肢體食少許立愈**雖彼中亦不多得俗曰**蜜人**畜言**木乃伊**

李時珍『本草綱目』人部（1596年）

- **木乃伊**《綱目》【集解】時珍曰：按陶九成《輟耕錄》云：**天方國**有人年七八十歲，願舍身濟眾者，絕不飲食，惟澡身啖蜜，經月便溺皆蜜。既死，國人殮以石棺，仍滿用蜜浸之，鐫年月於棺，瘞之。俟百年後起封，則成蜜劑。遇人折傷肢體，服少許立愈。雖彼中亦不多得，亦謂之蜜人。陶氏所載如此，不知果有否。姑附卷末，以俟博識。

漢字の「木乃伊」の起源

Mùnǎiyī

ただし、「木乃伊」は「ミイラ」とは読めない

「ミイラ」ではなく「もくのい」

無名異（李時珍『本草綱目』）

- （宋《開寶》）
- 【釋名】時珍曰：無名異，瘦詞也。
- 【集解】志曰：**無名異出大食國**，**生於石上**，**狀如黑石炭**。番人以油煉如石，嚼之如餳。頌曰：今廣州山石中及宜州南八里龍濟山中亦有之。黑褐色，大者如彈丸，小者如黑石子，采無時。曰：無名異形似石炭，味別。時珍曰：生川、廣深山中，而桂林極多，一包數百枚，小黑石子也，似蛇黃而色黑，近處山中亦時有之。用以煮蟹，殺腥氣；煎煉桐油，收水氣；塗剪剪燈，則燈自斷也。
- 【氣味】甘，平，無毒。頌曰：鹹，寒。伏硫黃。
- **【主治】金瘡折傷內損，止痛，生肌肉（《開寶》）。消腫毒癰疽，醋磨敷之（蘇頌）。收濕氣（時珍）。**
- 【發明】時珍曰：按《雷 炮炙論》序雲：無名止楚，截指而似去甲毛。崔《外丹本草》雲：無名異，陽石也。昔人見山雞被網損其足，脫去，銜一石摩其損處，遂愈而去。乃取其石理傷折，大效，人因傳之。

Mómíngyì（現代中国語ではwúmíngyìの発音が一般的）中国でも日本でもマンガンや鉄を含む鉱物・粘土を指し、陶磁器の釉として用いられる。

日本語のミイラ

- Mirra: Mirra toyŭ chijſaqi qi. Miguino qiyori izzuru yani（『羅葡日対訳辞典』1597年）　＝　没薬
- 「美知比登（＝「蜜人」）南蛮今云美伊良」（林羅山『多識編』1612年）
- 「ミイラ（トイヘル薬ナリ）」（＝没薬）（沢野忠庵『顕偽録』1644年）
  - 「彼ら（東方の三博士）はひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」（マタイによる福音書2:11）。
- 「みいら五匁」（1645年の項）（『大猷院殿御実紀』徳川家光）
- 「当世ハ**みいら**へいさらうにかうる井上殿（大目付井上筑後守政重）の妙薬のさた」（『談海』慶安4年（1651～52年））

江戸時代の「ミイラ」は「薬」だった。

Mirra（＝没薬）⇒　ミイラ　⇒　**没薬**

Mummie（＝防腐処理した人間の遺体）⇒モミイ⇒**ミイラ**

- へいさら＝ヘイサラバサラ
  - ヘイサラバサラはポルトガル語のペトラベゾアールから。さらにアラビア語のBāzuhr、ペルシア語のPād Zahr
- うにかうる＝ユニコーン

薬ミイラ

- 16世紀ごろにはミイラは薬としてヨーロッパのほとんどの薬局に常備されていた。

遠藤元理『本草弁疑』1681年

大槻玄沢『六物新志』1786年

「番薬」としてのミイラ

明治薬科大学明薬資料館

「鵠斎先生之家嘗蔵木乃伊之髑髏。又医官桂川君之家亦脊梁骨」

薬ミイラ

貝原益軒『大和本草』（1709）

- ミイラハ打撲折傷ニツケ内ニハ酒ヲ以送下シ甚効アリ。気血両虚ノ人梧桐子ノ大ニ丸シ一日ニ二度湯ニテ送下ス。労咳ノ症百方無効ニ丸シテ用。血脱ノ症産後金瘡吐血下血等ニ内服ス。
- 気ツカレ胸痛胸ニ結痰アルニ酒湯ニテ用。シャクリ胸痛ニ湯ニテ用、或酒ニテ服ス。牙歯痛虫食歯穴アキタルニハ蜜ヲ加ヘテ付ル。又穴ニ入レテヨシ……
- ミイラハ人肉ナリ用人肉者以人食人非仁厚之事

江戸のミイラ・ブーム

延宝期（1673～1681）

- 昔は六七拾年已前は**蜜人**と云薬夥しく流行、歴々衆大名ものみ下々ものむ。痞疝気によく虚性を補ひ、脾腎を調へ気力を強くし食傷其外の諸病に能とて是を調へて呑さる人なし。方々の薬種屋にてうる、赤坂蜜人とて赤坂に大阪屋と云薬種屋にて下直に売る、是を調へてのむ人多し。代は長崎屋にて廿双卅双ほとにうり、拾五双斗に売りもあり、赤坂蜜人は五双三双に売、是を調のむに年中には余程の薬代にて毎日三四度つゝ一度に三分も五分も七分も呑、扨何様の薬かと見るに、何薬種二三種絹にて練たる様の薬也。男女共此蜜人飲さる人なし、病気には何にもきかす亦あたりもせす、何の益なき薬也。七八年殊の外はやり段々呑衆なくなり、近年は蜜人の沙汰透となく成し也[後略]

『昔々物語』（新見伝左衛門朝正『八十翁嘸昔話』）

1673（延宝1）年、オランダ船が長崎で628ポンド余のミイラを売却（300kg強）。

✓ ミイラの効能はプラセボか？
✓ 現在の感覚でいうと、エナジードリンクのようなもの？
✓ 廓との関係（落語の「ミイラ取り」）

偽ミイラ（日欧）

- **貝原益軒『大和本草』**
  - ミイラニ五説アリ。四説ハ不可信。第五説ニ罪人ヲトラヘテ、薬ニテムシ焼キト云。此説是ナリ。
- **後藤梨春『紅毛談』（1765）**
  - 其の国の死罪に極まりたるものを臓腑をぬきひらき諸薬を腹内につめ地中へ埋置てみいらとなすともいへり。
- **小野蘭山『本草綱目啓蒙』（1803-5）**
  - ミイラハ紅毛ヨリ来ル。古渡、新渡、数品アリ。古渡ヲ良トス。
- **アンブロワーズ・パレ「ミイラについて」（1582）**
  - フランスの薬屋の一部は、吊るされた遺体を夜闇に乗じて盗み、塩や薬で保存処理し、オーブンで乾燥させ、真のミイラのかわりに、売却する。
- **ド・ラ・フォンテーヌ（パレの友人。1564年にアレキサンドリア訪問）**
  - ユダヤ人の暗躍

エジプトの偽ミイラ

- 827年（西暦1424年）、[カイロで]不思議な事件が起きた。総督は人間の死体をもっていた集団を逮捕した。彼らは新しい遺体を掘り出し、その骨から肉を取り出し、それらを鍋に入れ、フランク人に1キンタール当たり25ディーナールで売却した。彼らは逮捕されると、鞭で打たれ、その手を切り落とされ、つるされ、カイロ市内を引き回され、刑務所に入れられたものもいる。
- 918年（西暦1512年））恐ろしい事件の一つに（次のようなことがあった。）総督がデミルタシュと呼ばれるトルコ人を逮捕した。その男は、墓から遺体を掘り出し、頭や肉を取ってそれをフランク人に売っていた。彼らはそれから**ムーミーヤ（ムーミヤー）**を作っていた。彼が逮捕されたとき、遺体の骨や頭蓋骨、四肢をたくさん発見され、それらはロバに載せて、スルターンのもとに運ばれ、とうとうスルターンもその骨をご覧になった。彼はこれらの頭蓋骨について彼に尋ねた。すると、彼は、これらはアラブ人が古代の墓（قبور النواويس）からもってきたもので、それからムーミーヤを作り、フランク人の国で売ったと答えた。それから、彼らは骨のうえに新しい肉も発見した。人びとは、彼が毎日、沙漠に出かけ、新しい死人の墓から遺体を掘り出し、その肉と骨を取って、それらをフランク人に売っていたと証言した。スルターンは取調べを行い、彼に絞首刑を命じた。彼はラクダに縛りつけられ、カイロ市内を引き回されたうえ、果物屋街のそばの自宅に連れていかれ、そこで縛り首にされた。

Ibn Ijās 2008

ミイラ取りの流れ

エンゲルベアト・ケンプファー
- 1690年から2年半、長崎の出島付医師として日本に滞在。トゥーンベリ、ジーボルトとともに出島三学者と呼ばれる。
- それ以前はオランダ東インド会社付医師としてイランのバンダレ・アッバースに滞在。
- ミイラに関する詳細な論考⇒『廻国奇観』（1712年刊）
- Mumia Nativa Perſica (ペルシアの天然ミイラ)
- Muminahi（保存処理された人間の遺体）

ヨーロッパ	日本
1510 ルドビコ・ディ・バルテマ旅行記 1511 ラテン語訳 1548 ドイツ語訳	
1582 アンブロワーズ・パレ『ミイラについて』	1596年 李時珍『本草綱目』
1641 オランダ商館の出島移転	
1649 カスパル・シャムベルゲルの出島赴任	1645 公的記録におけるミイラ輸入の開始
1654 ディ・バルテマ旅行記のオランダ語訳	
1655 ハンス・ユリアーン・ハンケ赴任	**？ 向井元升『紅毛流外科秘要』**
	1670～80年代 ミイラ・ブーム ミイラ取りのことわざができる？
1688 ウィレム・ホフマン赴任	
1690 ケンペル赴任	
	1706 楢林鎮山『紅夷外科宗伝』
	1709 貝原益軒『大和本草』
	1788 大槻玄沢『六物新志』

パレの著作を紹介

序文を執筆

カスパル流外科術

楢林流外科

岡山県製薬株式会社　牛黄丸

	匁
牛黄	2.00
人参	3.00
熊胆	4.00
麝香	1.50
沈香	4.00
木乃伊	8.00
以上製丸480粒	
自一丸至二丸熱湯小許磨解服ス	
紙袋入	
二日分 0.50	
救気絶 解　毒 治食傷 霍　乱 蟲　痛 胸　痛	

家庭薬統制組合編『家庭薬全書』三昧書林、1947年、325頁

牛黄：牛の胆嚢に生じる黄褐色の結石のこと。漢方では狭心症・胃炎・腎盂炎などに効くとされ、『続日本紀』の文武2年（698）正月己巳の項に「土左国献牛黄」とあるように、日本でも古くから利用されていた。

薬としての人体
- 山田浅右衛門（首切り浅右衛門）家の収入源としての人体由来の薬を売る（人胆丸・仁胆）。
- 武家に試し切り用の死体を売ったり、遊女に死体の小指を売却したりしていた。

「誓ひして二度と入りまじ恋の町／もらふ小指の身胃羅ともなれ」『俳諧団袋』（1689年）

日本で人体由来の医薬品の販売が禁止されるのは明治3年。

薬としてのムーミヤー

- ミイラを意味するアラビア語はムーミヤー（Mūmiyā’）。この語が、英語のMummyなどのように、防腐処理された人間の遺体の意味で、世界中で用いられるようになった（例外：日本語と韓国語のミイラ）。
- ただし、もともとアラビア語のムーミヤーは防腐処理された人間の遺体ではなく、**ビチューメン（石油）を意味**しており、**防水**や**接着**、**武器**、そして**一種の万能薬**として中東などで用いられてきた。
  - シュメール時代、現在のイラクのヒートで油田（ビチューメン）が発見され、ジッグラト建造等に使用された。
  - 古代メソポタミアでは石油が消毒や手足の炎症、目の充血等さまざまな治療に用いられていた。
  - 旧約聖書：ノアの箱舟、モーセの箱舟、バベルの塔。
  - 古代ギリシア・ローマ時代にも止血や外傷の治療、白内障、白斑、ハンセン病、苔癬、痒疹、喘息等に効果があるとされた（例：ディオスコリデス『薬物誌』外陰部の充血、脱水症、癲癇、脱毛などさまざまな症状に効果）。
  - ギリシア・ローマ時代の医師は石油を一種の万能薬とみなしていた。
  - とくに有名なのが**「死海の瀝青 Bitumen Iudaikum」**（ギリシア・ローマでももともと中東起源という認識）。
    - 日本では縄文時代に土器の修復や石鏃と矢柄の接着などに用いられていた。

イスラーム世界に伝わり、ムーミヤーと呼ばれるようになる。
- ペルシア語のムーム（蝋）が語源？
- ビチューメンやアスファルトはイスラーム時代にも浴場の防水や道路の舗装にも用いられていた。ただし、この場合、ムーミヤーの語は使われない（qīrやqār等）。

イブン・バットゥータの旅行記にはバグダードの浴場の記述、またクーファ・バスラ間およびガイヤーラでビチューメンが産出されると記載されている。

古代エジプトのミイラとビチューメン

- 新王国時代（前1550-1544年ごろから1069年ごろ）以前にはビチューメンの使用は見られない。
- 新王国から末期王朝時代（前664年-332年）にはミイラの50%にビチューメンが使用される。
- プトレマイオス朝時代（前305年-30年）以降はさらに87%に増加。
- ただし、遺体を保存する薬品全体からみれば、ビチューメンの含有量は45%を超えることがなかった。
  - K. A. Clark, S. Ikram and R. P. Evershed, “The significance of petroleum bitumen in ancient Egyptian mummies,” *Philosophical Transactions A*, 374(2019)

したがって、古代エジプトのミイラのなかにある黒っぽい物質はかならずしもビチューメンではない。

© JIME-IEEJ

エジプトのムーミヤー

- これらの**遺体の腹部や頭部にはたくさんのムーミヤーと呼ばれる物質**がある。そこの住民はそれを町にもっていき、二束三文で売る。私は半エジプト・ディルハムでこの物質のつまった頭を３つ購入した。この薬を売るものの一人はこの物質が詰まった袋を見せてくれた。そこには遺体の胸や体があり、同様にそれがいっぱいであった。[中略]
- このムーミヤーはタールqufrのように黒い。夏の熱にさらされると、溶けだし、触れたものを何でもくっつけてしまう。火中に投ずると、沸騰して煙を出し、タールやピッチziftの臭いがする。多くのものは、[エジプトのムーミヤーが]ピッチと没薬murr[の混合]であると述べている 。ムーミヤーについていえば実際のところ、山の頂上から水とともに流れ出すものである。[―中略―]エジプトで死体の洞窟で発見されるものは[本当の]ムーミヤーの性質とあまり変わらない。[本当のムーミヤーを入手するのが]困難な場合、[エジプトの]ムーミヤーが代わりに用いられる。
  - al-Baghdādi 1965

ムーミヤーの変化

- イブンヌルファキーフ（10世紀）『諸国誌』「アッラジャーンの驚異のひとつに山のなかの洞窟がある。そこから水が湧き出ていて、やがてそれは白いムーミヤーイ（al-Mūmiyāy）に変わる。これこそ白ムーミヤーイである。洞窟の入り口には鉄の扉がつけられ、ときおり1 日だけ、町の貴顕たちの列席のもと開けられる。その後、男性が裸になり、なかに入り、そこにあるものを壺のなかに集める。1年間で集めたものは全部で100 ミスカールほどになる。その後、扉は閉められ、鍵がかけられる。」
- ビールーニー（973～1048）「ムーミヤーはビチューメンでできている」
- イブン・シーナー（980～1037）『医学典範』「ムーミヤーの性質は、混合されたビチューメン（zift）とタール（？qufr）の力（qūwa）にあり、きわめて効果的である。質量は第3段階の「温」。腫瘍と吹き出物：痰性の腫瘍に有効。関節器官：脱臼、骨折、転倒、打撲、麻痺、痙攣の痛みに、飲んだり、軟膏として使用してもよい。頭部：片頭痛、寒冷性頭痛、癲癇、眩暈にも有効。」

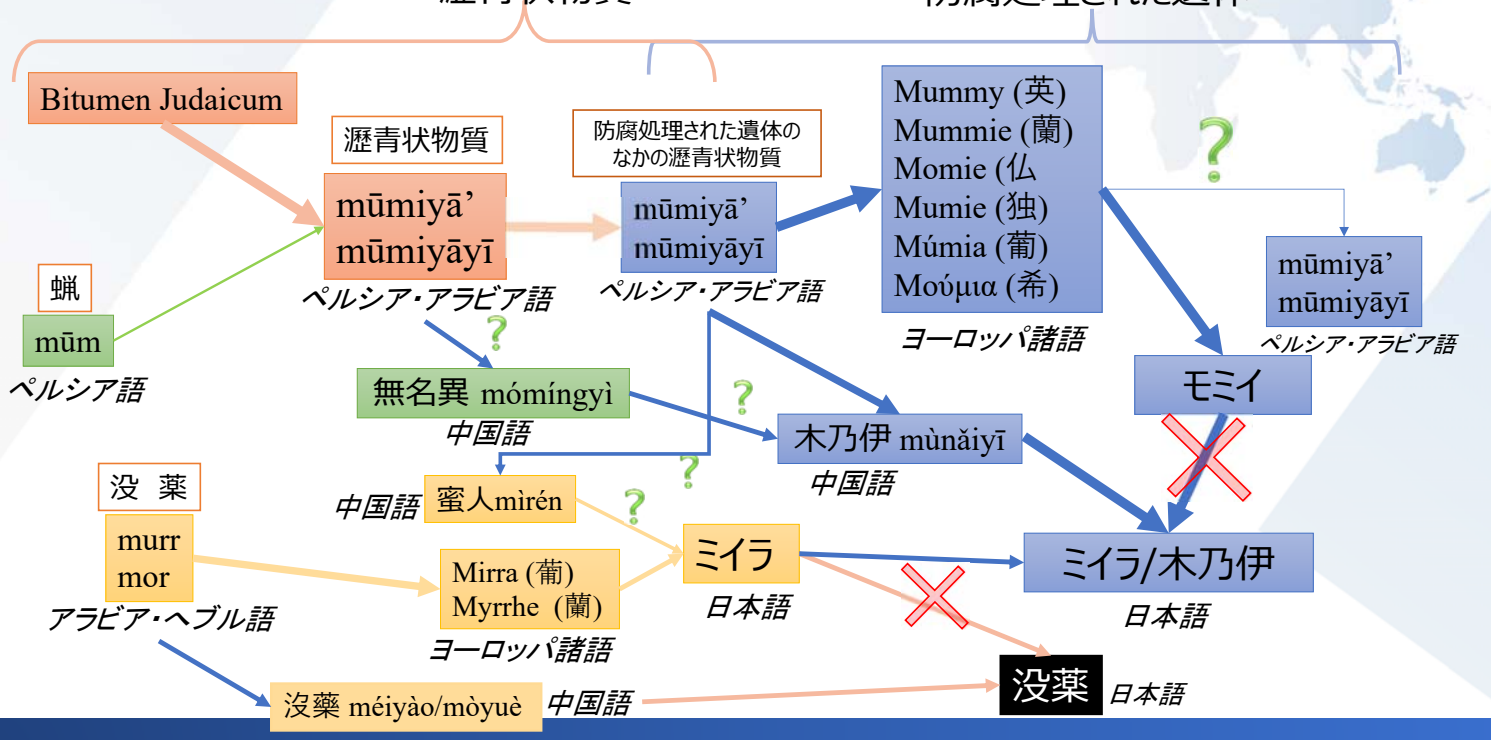
石油

何があったのか？

- マイモニデス（1135～1204）「墓のムーミヤー」
- バグダーディー（1162～1231）「（保存処理された）遺体のなかにある物質」
- イブン・バイタール（1188～1248）「墓のムーミヤー」
- シャムスッディーン・ディマシュキー（1256−1327）「鉱物・植物・動物のムーミヤー」最後のものが「人間の肉体の粉末」

防腐処理された遺体

ムーミヤーの変化



ミイラと石油？

- 日本の油田地帯の新潟
- ミイラ（即身仏）の宝庫
  - 石油と何か関連があるのか？
- 美濃国谷汲の開基豊然上人、延暦年中草創の時、その地を平均す。所に一つの巌を鑿りければ、**石中より油湧き出でたり**。豊然誓ひて曰く、我れ此の地において、大悲の像を安置して、もし広く利益せば、願くば此の油ますます多からんものなりと云ひをはると、則ち油湧きいづること泉のごとし。豊然大によろこび、十一面観音を安ぜられける。其の長五尺の像なり。其の後延喜の帝、その瑞応をきこしめされ、額を華厳寺と賜ふ。其の油漸く微しきなれども、尊前の常燈を燈すほどは今以つてあり。（『諸国里人談』）

寺泊にある西生寺の弘智法印のミイラのレプリカ

華厳寺のすぐそば横蔵寺にある妙心法師の即身仏

- ただし、実際に入定したのは山梨県の御正体山

参考文献

- 岡山光憲1977-8「本邦薬用みいら考1-2」『武蔵大学人文学会雑誌』9（1/2、4）
- 保坂修司2009「薬ミイラ考―日本エジプト交流秘史」『イスラム科学研究』5
- ----2012「大槻玄沢とミイラ」大槻玄沢顕彰会『講演記録集』第2号
- ----2013「薬ミイラ再考」『永遠に生きる = Eternal Life：吉村作治先生古稀記念論文集』
- ----2013「元禄のミイラ取り」『青淵』第771号（2013年6月）
- 南方熊楠1971」「ミイラについて」『南方熊楠全集３』平凡社
- 山脇悌二郎1995『近世日本の医薬文化―ミイラ・アヘン・コーヒー』平凡社
- Baghdādī, al-‘Abd al-Laṭīf (wr.), Zand, H.K., Videan, J.A. and Ivy, E.（trs.）1965. *The Eastern Key*, London
- al-Bīrūnī 1984. *Kitāb al-Jamāhir fi Ma‘rifa al-Jawāhir*, Bayrūt
- Daly, O., El- 2005. *Egyptology: The Missing Millennium: Ancient Egypt in Medieval Arabic Writings*, London
- Dimachqui, ed-, Abou Abdallah Mohammed Chems-ed-Din 1866, *Cosmographie de Chems-ed-Din Abou Abdallah Mohammed*, Saint-Petersbourg
- Forbes, R.J. 1958. *Studies in Early Petroleum History*, Leiden
- ----. 1959. *More Studies in Early Petroleum History*, Leiden
- Ibn Baṭṭūṭa 1980, *Riḥla Ibn Baṭṭūṭa*, Bayrūt
- Ibn al-Bayṭār 2001. *al-Jāmi‘ li-Mifradāt al-Adwiya wa al-Aghdhiya*, Bayrūt
- Ibn al-Fakīh al-Hamadhānī 1885. *Kitāb al-boldān*, ed. M.J. de Goeje, Lugduni-Batavorum
- Ibn Ijas 2008. *Die Chronik des Ibn Ijās*, ed. Mostafa, M., Cairo
- Ibn Sīnā .*al-Qānūn fī al-Ṭibb*, Būlāq